

ふみの会 ニュース

■発行 　ふみの会広報部
 ■発行日 　2005年9月27日
 ■連絡先 　藤川博樹
 　　　　　〒115-0045
 　　　　　北区赤羽1-48-3 ドミール藤203
 　　　　　tel03-52495797 fax03-3901-6090
 ■編集 　塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

No.286

10月行事日程

■ ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ
ワード文書も可

kamo@sun.email.ne.jp

エッセイ：5枚（2000字）

小説：10枚（4000字）目安

■ 期日未定

四ツ谷地域センター 11F

地下鉄丸の内線 新宿御苑下車徒歩5分



アフリカのワニ笛、マトリョーシカ、人魚姫など

◆総選挙の結果のひどさに、唾然としてしまつて沈黙の一週間でした。こんな結果、誰も望まなかったでしょう。大勝利した当の小泉純一郎も、予期していなかったような気がします。◆だいたい、与野党の得票比率は51対49です。ほとんど僅差なのです。それなのに、議席占有率は7：3です。このひどさは、全く民主主義ではありません。これが「政治改革の本命」と言われた小選挙区制の結果なのです。こんなのはウソっぽいです。より市民の意見を直截的に反映する選挙制度が必要ではないでしょうか。◆小泉首相は「民間で出来ることは民間に」と言います。しかし、い事実上、銀行と政党が国営化していることには一切触れません。バブル崩壊以後、ゼロ金利が続いています。国民に支払われるべき金利10数兆円がバブルの後始末に使われたのです。いま、年利1%でもいい、まともな金利を払う銀行が出たなら、国民の預金が集中することは容易に予想できます。しかし、そのような銀行は出てきません。これは国策で金利が統制されているということであり、銀行が国営化されているということです。◆また、自民党も民主党も政党助成金を数百億の規模で受け取っています。もはや政党は税金の補助なしには成立しないかのようです。これは政党の国営化にほかなりません。もともと政党助成金は企業献金の廃止が前提だったのに、そちらのほうは相変わらず続けられています。迂回献金も横行しているという現状をみると、政党助成金の趣旨は捻じ曲げられていると感じます。◆銀行と政党を国営にして、公社でうまくいっている郵便局をどうして民営化しなければならないのか？国民はその裏をよく考えなくてははいけません。少なくとも、小泉首相のスローガンが眉唾ものだとすることは気がついてほしいものです。(N)

◆新人会の滝本文彦氏より、会費とカンパの切手をいただきました。

◆新入会

滝本文彦さん

おれたちの村

⑧

蒲原ユミニ子

陽平は湖の土手を渡り向こう岸の茂みに入った。紅葉の原木が二またに分かれていて馬の鞍のようになっている。陽平はそこにまたがった。そこだと、湖も空も見えて気持ちがいい。それに、山道からは見えない陽平の隠れ家だ。昼寝も出来るくらい太い幹だけれど、ムサシは残念ながら犬だから木に登れない。根本でご主人である陽平を見上げている。

陽平は母ちゃんからもらった小袋を取り出した。中にさきいかが入っていた。口に入れる。

(うまい！)

運動したあとなのでよけいいうまい。ムサシにもぼんと投げてやった。ムサシはぱくつと上手にくわえふんがふんがとかみ始めた。飲み込むと、また陽平を一途な目で見上げる。陽平は続けて投げてやる。お屋敷のじいさまには、「ムサシには食べ物

をやらないように」と言われているが、こんな気持ちのいいところで自分だけ食べるなんてできない。2人だけの秘密である。こういう時、ムサシは人間のようにおしゃべりしないから、陽平は安心していられる。そして、ふと、思った。

(このさきいか、母ちゃんのおやつだったのかも知れないなあ)

一度だけ、母ちゃんのいる旅館に入れてもらったことがある。客間の掃除から料理の手配、帳簿付けと、母ちゃんはいつときも休んでいることがなかった。夕方までには、ここになくなってしまいうだろう。すぐおなかのすく陽平はさきいかをかみながら母ちゃんの腹を心配した。

とつぜん、声が出た。

「やあ、これは美しい！」

見ると、山道を登ってきたおじさん達である。4人いる。みんな、このくそ暑いのに、背広を着ている。1人は山村のじいさまの息子では

ないか。前、健人が雪山からすべり落ちて風呂に入れてもらった時に会っている。じいさまに似た鋭い目ははわずれられない。

おじさん達はさすがに背広を脱ぎながらしゃべり始めた。

「この湖に白鳥なんかのボートを浮かべると似合いそうだから、つばさないう方がいいですかね」

「ゴルフに、乗馬場はもちろん、トレッキングコースもいいですね」

じいさまの息子は背広を着たまま涼しい顔で言った。

「東京のヒートアイランドに比べたら、ここは別天地です。いいリゾート地になりますよ」

陽平がひそんでいる茂みからけっこう離れているのに、もろに聞こえてくる話にびっくりした。おじさん達はこの辺一帯をちがうものにかえてしまつつもりらしい。こんな話は初めてである。そういえば、村の山はほとんど山村家の物だと聞

いたことがある。それで、前にもおじさん達がお屋敷に来ていたのかと、陽平は合点した。

(ふうん・・・)

しかし、陽平にはおじさん達の話がぴんときなかつた。なにか、別の世界の話のようである。が、ここはじつとかくれていた方が良さそうな気がした。陽平はムサシと目を合わせ、息をひそめていた。

おじさん達が帰ってしまったと、山の空気がやわらかくになり、おだやかさがもどった。

「さてと」

陽平は木から下り、ムサシに「帰るぜ」と言おうとした時だ。

ワシッ ワシッ ワシッ

と大きな羽音がした。

「おおっ！」

中型の鳥が数メートル上を横切つていった。ほんの数秒だったが、陽平の目にはスロモーションのように鳥の動きがはつきり見えた。腹

の白い羽毛、両肩に丸い黒模様、引っこめた足。鋭い鉤口にネズミをくわえ、山に向かつて去った。

陽平は鳥がいなくなったあとも、しばらくぼうつとみとれていた。それからほっとしたように鳥が消えた山を指さし、ムサシにさげんだ。「あそこに行ってみよう！もしかして、あのかっこいい鳥の巣が見つかるかもしれないぜ」

小一時間ほど、陽平とムサシは山の中をうろうろとあの鳥の巣をさがしまわった。

しかし、そうかんたんに見つかるものではないようだ。空が夕暮れでき、くたくたにくたびれてしまった。陽平はムサシに言った。

「おい、きょうのところはかえろうか」

それから家までの道は遠かった。足が重くて来たときの倍以上かかり、お屋敷へムサシとたどり着いたのは、とつくに日が落ちてからだった。

やったあ！

3年になってはじめてのプールだ。陽平は一番最初にシャワーを浴び、プールサイドにすっとんだ。桜田先生に、「プールサイドは走らないでね」と言われたが、足がひとりでに走ってしまう。

バスタオルをフェンスにさしこみ、2番にやってきたヒロキと腕の筋肉をじまんし合うガッツポーズをした。ピンクやひらひらのついた水着を着た女子もやってきた。泉も来た。紺の海水パンツだ。長い髪は青い帽子の中につっこんでいる。すらいと泉の水着姿を見て、陽平は（やっぱ男子の子なんだな）と思った。あたりまえのことなのに、転入初日に泉を女の子だと思ったイメージがどこに残っていたのだ。さいごに桜田先生が出てきた。先生は学生みたいな紺のシンプルな水着である。色白でもグラマーでもないが、陽平にはまぶしかった。おまけのように、中年太りした教頭先生も海水パンツ姿で出てきた。緊急事態にそなえてだろう。準備体操を終え、桜田先生は手メガホンにして叫んだ。

「では、はじめに水なれです。プールサイドに腰を下ろして足だけだばたばたしましょう！」

みんなはりきってプールサイドに腰を下ろし両足をプールにつっこみ、バタバタとやりだした。「やったあ、やったあ！」という感じで力任せに思いきり水をジャブジャブ打つ。冷たい水が白くきらめいてはね上がる。

ピーツと笛を鳴らし、桜田先生が金切り声を上げた。

「では、みなさん。プールに入ってみわりの人と水かけっこです」

待ってましたとばかり、みんなはざんぶとプールに入った。そして、キヤアキヤア言いながら両手で水をはねあげた。このクラスには水が苦手な女子はいないようだ。みんな大口を開けはじけるように笑っている。

陽平はうれしくてたまらず両手を水車のようにぶるんぶるんまわして水をかけまくった。それからもぐり、水中でヒロキの足をつかんだ。ギヤツと言ってヒロキももぐる。守もタカシもたがが外れたように頭から水をかぶってぶざげ始めた。学

級委員長の正夫まで泳ぎ出した。だんだん、桜田先生がなにか言ってもみんなの耳に入る状態ではなくなつた。

こまっておろおろしている桜田先生に、教頭先生がハンドマイクを渡し、赤いブザーをさして言った。「ここを押しごらんさい」

桜田先生は力いっぱい押した。ウオオオ〜ン

けたたましいサイレンの音がした。プールの中で、はしやぐまくつていた子どもたちはぎよつとして静かになり、先生のほうを向いた。桜田先生はほっとして言った。

「みなさん、先生の言うことを聞いてください。勝手なことをしたら、プールはおあずけですよ、危ないから」

みんな、しゅんとなった。教頭先生は「その通り」という顔でうなずいた。(つづく)

8 意外なできごと

相続ニ依リテ富ム

蒲原直樹

混沌市は元をたどれば原野だった。南の松葉宿、北の丸子宿に挟まれた、無人の街道が延びるだけの田畑もない原っぱで、馬の放牧場になっていたらしい。それがメガロポリスが拡大するにつれて松葉市が満杯になり、その北側に住宅地を開発せざるをえなくなったのだ。必然的にこの街の住民は新参者ということになる。先祖代々の住人、という旧家は一軒もないのだ。まして、そんな街に転がり込んできたフリーターに先祖などいるわけがない。先祖どころか親類縁者の一人もいないのが当然なのだ。しかし中にはどういふ偶然か、そうした縁のある人々との巡り合いを経験する者もいるかもしれない。

小野寺雪夫は混沌市駒薊町の木造モルタルアパートの四畳半で、週刊誌の占いのコーナーを見るとき眺めていた。自分の干支を示す猿のイラストの下に「金運」の文字があり、星が三つも並んでいた。三五歳フリーターの小野寺に、金運といってもどこにもあてない話だった。あいにくと彼はギャンブルもやらず、競馬で万馬券という話も縁がな

った。そういうわけで納得のいかない彼はさうらに下の行に目を向けた。そこには、『相続ニ依リテ富ム』の文字が並んでいた。

「相続かよ……！」小野寺は苦笑いした。

実家は山梨の貧農で、両親もまた貧農の出身だった。よくは知らないがどちらの祖父母も似たようなものだろう。相続するような財産などどこにもないはずだった。

「これだから週刊誌の占いなんて信じられねえんだよなあ」

数ヶ月たったころ、バイト先に一本の電話があった。受付のおばさんからその電話を受け取って、話を聞いて小野寺はびつくりした。

「あなたに数千万の遺産が入ります」

「ほんとうですか？」そう聞き返す声が震えていた。

弁護士と名乗る男は翌日アパートに訪ねてきた。高そうなスーツは着ていたがネクタイはなく、ごま塩頭と同じ色の口ひげを生やしていた。小野寺は警戒してお茶も出さなかった。

「手続き料とか、書類代とか、必要なん

よう？」

「はい、それはそうですが、こちらは成功報酬ということで、現金が入った後でけっこうです」

「そう言われると詐欺の類ではなさそうだった。」

「その、遺産の送り主はどういう人物なんです？……ばくの親類なんですか？」

「そうですね、そういうことになりますか」

「叔父ですか、叔母ですか？……それとも曾祖父の系列とか……」

「違います」

弁護士を名乗る男はもったいぶってなかなか応えなかった。

「かっがれているような気がするなあ……ばくの家系って、みんな貧乏人なんですよ、遺産なんてどこからも出てくるはずがないんだけど」

「そうかもしれませんね」

否定しない男に小野寺はますます疑問がふくらんだ。

「じゃあ、誰なんです、ばくの家系じゃなければ誰の家系なんですか？……違う家系の人から遺産が入るはずがないじゃないですか、

からかわないでください」

「そう言われて弁護士を名乗る男は座り直した。」

「小野寺さん、数年前に同棲していた相手がいらっしゃいましたね？」

小野寺はドキッとした。

「宮本月子さん、同じコンビニに勤めていた同僚の女性です」

「しかしあれは……」

小野寺は言葉に詰まった。

月子は無口な女だった。どちらかと言えば不細工だったが、味のある不細工だった。そして女らしい体には男心をそそるものがあった。彼女の方は最初から小野寺を見る目つきが違っていて、誘うと二つ返事でついてきた。恋人といえる女性もいなかった小野寺は、遊び相手として月子とつきあう事にした。すると図に乗った月子は彼のアパートに転がり込んできたのだ。

「むこうが勝手に結婚すると思込んだんでね……ばくのほうは、その気はなかったんですよ。それで、一週間くらいで別れました。ばくのほうは逃げ出したんですよ」

昼も夜も一緒にいると、女のくどさやしつこさがたちまち鼻についた。小野寺はたまらなくなつて、黙つてアパートを飛び出し、勤務先のコンビニもそれっきり行かなかつたのだった。

「そうですか……しかし、これを見てください」

自称弁護士は一通の戸籍抄本を取り出した。それを見た小野寺はひっくり返つた。

『小野寺月子・妻、世帯主・小野寺雪夫』

そこにはそんな文字が並んでいたのだ。

「あいつ……オレに黙つて、勝手に婚姻届を出したんだな、なんてやつだ！」

「まあ、落ち着きなさい」

自称弁護士は抄本を破りそうな小野寺を制し、それを大事そうにまたカバンの中にしまひこんだ。

「あなたの同意はなかつたかもしれませんが、法律的にはあなたに相続権が発生したんです。……もちろん相続を放棄することもできます。

同意していない結婚だと主張されるのなら婚姻無効手続きをとることも出来ます。しかし都内の一戸建てと預貯金、有価証券など全て数千万の財産ですよ、受け取つたほうがお得だと思いませんか……」

弁護士を名乗る男は散らかした四畳半の中を眺め回しながら言った。

「彼女は一人っ子で甘やかされて育つたようで、中高生時代はかなり悪かつたようです。

都内の女子高を中退するような形で家出して、この混沌市へ流れ着いたようですね。二両親はそれでご心痛になつて、お二人とも早逝されました。私は事後の処理を頼まれていたんですが、月子さんに連絡が取れたのがつい半年前のことでしたね……」

彼は感慨深げにため息をついた。

「それが救急病院でした。月子さんは事故にあわれて、瀕死の重症を負っていたんです。

いまわの際に月子さんの口から出たのがあなたの名前でした。彼女は最後まで小野寺夫人のつもりだったんですよ」

小野寺は演歌のような話の展開に目を白黒させた。そして頭の中に浮かんだのはいつか週刊誌の占いコーナーで読んだ、

『相続ニ依リテ富ム』

の八文字だった。あれはこのことを示しているのだらうか。

「……わかりました。とりあえず、話を聞きましょう」

翌週、非番の日の午後、小野寺は都下府中市の月子の生家に出かけてみた。西武多摩川線沿線にあつたその家は、多少古びてはいたが緑色の屋根のモダンな設計だった。築三十年となれば不動産としての建物の価値はゼロに近いが、逆に骨董品的な価値のありそうな家だった。二生に一度でいいからこんな家に住みたいものだ」小野寺は真剣にそう思うよ

うになつた。混沌市のポロアパートに帰ると彼はさつそく自称弁護士に電話して遺産相続を承諾した。

手続きを済ませて受け取つた貯金や有価証券の額は案外少なかったが、小野寺はあの家に住めるといっただけで嬉しかつた。彼はさつそくわずかな家具をまとめ、レンタカーを借りて府中の家に運び込んだ。かび臭くなつた家の雨戸を開け、窓を開いて外気を入れた。

うっすらと埃の積もつた床に旧式の重い掃除機をかけると一息ついた。冷蔵庫に入れておいた安い赤ワインのボトルを出し、棚の奥からベネチアものらしいワイングラスを出して一人で乾杯した。

窓の外には多摩川岸に繋る桜並木が映つている。その向こう側に夕日が落ちていく。赤い光が赤いグラスの中の赤いワインに映えている。小野寺は静かな興奮と少しの不安と、涙ぐみそうな喜びに包まれていた。その時、玄関に人の来る気配がした。カギのかかつた扉を誰かが開いた。そしてリビングへ歩いてくる。足音がリビングのドアの向こうで停まり、ガチャリと音を立ててドアが開かれた。小野寺は持っていたグラスを落としそうになつた。

「ただいま」

そこには少し痩せて大人っぽくなつた月子が立っていた。

「おまえ、なんでここにいるんだよ！」

小野寺が冷や汗を流しながら叫んだ。月子はミニスカートで素足にスリッパをはいていた。足があるところを見ると幽霊ではない。

「だつてここ、あたしちだもん」

「あたしんちって、おまえ、死んだんじやなかつたのか？」

「へへへ……」

月子はずるそうに笑つた。

「あなたをひっかけたんだよ、叔父さんが興信所をやつていてね、あなたのこと調べてもらったの。ついでに弁護士役をやつてもらつたんだ。なかなかいい演技してたでしよ」

「探偵だつたのか、あいつ……」小野寺は天を仰いだ。

「両親がいなくなつたのは本当だよ、二人とも老後を海外で過ごすことにしてニュージールランドに渡つたんだ。だからこの家は本当にあたしのもの、あなたとあたしのものだよ。いっしょに楽しく暮らそうよ」

そう誘われて小野寺はいやだ、とは言えなかつた。一度手に入れたものを手放す気になれなかつたのだ。彼は女の罠と知りつつ、その家の虜になつた。しかしそれが予言の『相続ニ依リテ富ム』ことだつたのかどうかは自分ではよく分からなかつた。

空木岳に登る(一)

中井 豊

この夏(七月二七、二八日)、中央アルプスの空木岳に登った。友人の嶋倉夫妻にお供したのである。台風が名古屋方面に接近していた。しかし、台風が過ぎ去れば、好天に恵まれるので、相談の上予定通り出発することになった。

嶋倉完治さんの自家用車で、二六日の昼前に大阪を出た。中津川で高速道路を下り、スーパーで食糧を買い込んで、JR中央西線・須原駅のある大桑村で伊奈川沿いにあるというキャンプ場の様子を尋ねた。

キャンプ場の世話をしているオヤジさんは、
「ずいぶん前には、やっていただけねえもつキャンプ場はないよ。」
と、言う。

「テントさえ張ればいいのです。」
「台風が近づいているから、テントなど張つてもしょうがない。村が管理している《もみじ荘》という小屋の鍵を渡すから、そこへ泊まりなさいよ。何なら、以前は演劇の唐十郎さんたちも何度か泊まったことがあるし、うちに泊まったらどつどつ。」

開いたままの押入れを指さし、

「ほら、蒲団も沢山ある。」

「それは嬉しいのですが、何度も雨の中でテントをかついで山へ入っているのです、テントで寝たいのです。……でも、山小屋の鍵はお借りします。」

「そうかい。じゃあ、お金は要らないから小屋に泊まるといい。そうしなさい。」
と、書類の束を掻き回して、

「確かこの辺に仕舞った筈……。」
しばらくゴソゴソやった後、鍵を渡してくれた。さらに、太い蠟燭を二本、
「電気・ガス・水道・電話は切つてあるから、これを使うといい。」
と、渡された。

雨の中を伊奈川に沿って走つてみると、テントなど張れそうな場所がない。あるいは大雨になることを考えると、矢張り《もみじ荘》に泊めてもらう方が無難なようだった。

翌朝、三時半頃に起き、朝食を摂った後、荷物を片づけ、小屋を掃除して、出発。行ける所まで車で行き、駐車する。

「空木岳・南駒ヶ岳・越百山」という標識がある。林道を歩き始めた時は五時二〇分になっていた。

一般車は通行禁止でも道は広い。舗装

されていないので、登山靴で歩くのも苦にならない。六時五〇分に「赤沢」の分岐に着く。ここで一休み。空は明るいので、通り雨が来た。

さらに三〇分ほどで、兎平登山口に着く。やつと山登りが始まる。いきなり急勾配が続く。先頭を登って行くと、ガサガサツと音がして兎が逃げた。一瞬のことだったが、黒っぽい姿をしていたような気がする。久振りの登山なので身体が慣れるまでと思つても、やはり苦しい。

八時五〇分、六合目の北沢小屋跡に一旦下つて、スーパーで買ったオニギリを食べる。沢を渡るための吊り橋がかかっている。念のため一人ずつ渡り、さきほど下りた分から登り返さねばならない。始めはジグザグに登り、やがて延々とした直登となる。

やつとの思いで七合目に着いたのは一〇時前。空はすっかり晴れたが、樹林帯だから直射日光を浴びて歩くわけではない。それでも、全身汗である。夏山に登る目的の一つである涼感を得るには、もつと登らなければならぬ。

間もなく御嶽山が見える場所に出る。頂上付近は雲だ。それでも大きな山が見えると気分が変わる。

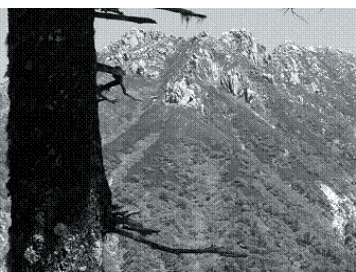
「仙人の泉」に着くと、管から一条の水がどンドン流れ出ている。「八合目へ四〇分」の道標。疲れていたためか、水

の味は記憶にない。

一二時二〇分を過ぎて、やつと八合目。ここで昼食にする。昨日買ったパンと牛乳などだ。パンにしたのは腐りにくいという理由である。道標に「木曾殿越へ一時間一五分」と彫つてある。一九八三年版の地図(昭文社)には四五分と印刷され、「空木岳美しく望める」と記されている。しかし、樹木に遮られて山は見えない。あるいは八合目の場所が移されたのかも知れない。陽が当たって暑い。

しばらくすると、御嶽山がよく見える。空は晴れ渡つていても、頂上には雲が懸かっている。右側に流れ落ちる稜線が特徴の大きな山だ。私達の目指す空木岳に連なる峰も見えている。緑に覆われている傍らは砕けたような岩石である。

一二時三〇分、「見晴場」に出る。ここでも空木岳頂上は確認できない。ともかく空木岳と思しき辺りを写真に撮る。(つづく)



遙かなる戦火

内田幸彦

(七) 戦後六十年に思う

八月十五日、原爆製造に加わり、エノラゲイに乗って写真撮影までした米国の科学者が日本人記者と会い、意見を交換した。日本人被害者はその被害の甚大さ、今も苦しむ原爆病患者への謝罪を求めると、

「謝罪しない。戦争の被害者はお互い様だ。リメンバー・パールハーバー!」

と語気を強めた。

真珠湾攻撃については、米国は突然の騙し討ちだと言うし、日本は所定通り通報したが、日本大使館員が留守だったので通報が遅れたと言う。どちらが正当なのかは藪の中だが、米国の損害は主力戦艦8隻と将兵3300人、住民68人だった。(カップブックス『太平洋戦争・上巻』より)

それに較べ、日本の原爆被害者は、広島・長崎を併せて死者29万人、その後の死亡者・罹災者を加えると80万人に上(のぼり)、実に米側の220倍以上の被害である。

原爆使用により、米国は戦争終結を早め、米兵の被害を食い止めたかったであろうが、東京を始め、名古屋・大阪は焦土と化し、他の中小都市さえも度重なる空襲で潰滅状態にあり、放つて置いても日本が一ヶ月ももたないことを米国は知っていた。

敢えて原爆投下した理由は、初めて開発した原爆の威力を知りたかったことと、当時まだ原爆をもっていないかったソ連への牽制だったという。

そこへ、欧米人特有の有色人種軽視も潜在していたに違いない。黄色く小さな日本人はよく働き、彼等には鼻持ちならなかったと思

われる。米国内で屢々耳にする黒人との対立を考えれば、容易に想像されるところである。

《君に忠、親に孝》《大東亜の盟主日本》《神国日本》と日清・日露戦争以来叩き込まれてきた日本人は皆、戦時中は国のために死ぬ気でいた。

突然の終戦に一時は呆然としたものの、日本は豊かな消費生活・言論の自由・信仰の自由・恋愛の自由と、何でもありの時代を迎えた。そこへ、一九五五年から一九六一年にかけての神武景気・岩戸景気でお金がふんだんに入る。消費と享楽に浮かれ、日本人は辛抱も、常識も何処かへ置き忘れ、無軌道な自由を身につけてしまった。権利のみを主張し、義務を考えない得手勝手な社会を造ってしまった。

連日のニュースは今までの日本になかった犯罪で溢れている。銀行強盗・保険金殺人・衝動殺人・幼児誘拐など、行き過ぎた自由の結果である。昔を知っている我々にしてみれば、これからの日本は

どうなるのか、想像もつかない。

一九四五年(昭和二〇)、敗戦と共にアメリカ民主主義を押しつけられ、鵜呑みにした日本人は浮かれた結果、日本人の良さを失った。邪推かも知れないが、六十年前、米国は日本人の墮落を見越して、アメリカ民主主義を歪めだ形で導入したのではないかと思うことがある。

もともと、日本人にも軽佻浮薄なところがあり、キリスト教のお祭にバカ騒ぎしてみたり、相撲に外国人力士を入れて人気をとったり、白人を無条件に畏敬する悪い癖がある。

私は貧しくも心豊かだった昔の日本が懐かしい。

ヒカル君の冒険 5

藤川博樹

お父さんが買ってきた三輪車

ヒカル君はお母さんと一緒に、坂の上ですわっていた。ヒカル君とお母さんは、よくこうして夕方、家の前でお父さんが会社から帰って来るのを待っていた。草原の上を気持ちの良い風が吹いていた。初夏の夕方はまだ明るい。

お母さんが立ち上がって、ヒカル君が気づいたときには、お父さんが坂を上ってきていた。お父さんはここにこ笑って、新しい三輪車を片手で頭の上に高く差し上げた。細い前輪をおおった幅広のカバーは銀色にぴかぴか輝いていた。ハンド

ルには、セルロイドでできた、ピンクと白と赤の吹き流しがついていて、風にさらさらとゆれていた。

ヒカル君は夢中になって駆けていった。

ヒカル君は嬉しくて、毎日三輪車で遊んだ。あまり嬉しかったので、どうやって三輪車で遊んで、三輪



車でどこまで行ったのかおぼえていなかった。ヒカル君が気づいたときには、セルロイドの吹き流しはどこかに散ってしまっていた。三輪車の前輪のカバーはいつのまにかとれてなくなり、ゴムの細いタイヤが、よごれてみじめにむき出しになって残っているきりだった。

ヒカル君けがをする

ヒカル君が三歳になった時、駅の近くの家に引越した。二軒長屋でつながった、ワンワンのお家ともお別れだし、反対側のカズノリちゃんのお家ともお別れだ。

隣のワンワンのお家は犬の毛だらけだったので、お母さんはあまり良い顔をしなかったが、ヒカル君は縁側つたいにびよんびよん跳んでいってお菓子をもったりして、おぼさんにかわいがつてもらった。垣根を隔てた反対側の隣の、カズノリちゃんの家には、少し年上の兄弟がいて、遊んでもらった。だけどヒカル君はあまりそのことをおぼえていないんだ。

そして、ヒカル君はハルオちゃんの家の方に引越した。家財道具と生まれたばかりの弟はお父さんが膝に抱えてトラックで運んだ。ヒカル君とお母さんは、乳母車で引越した。ヒカル君が乗った乳母車を

押しながら、お母さんは山の中の細い道を歩いていた。左右の林に囲まれた、山の中の一本道を歩いていて、お母さんがふと振り返ると、いま通ってきた道を蛇がわたっていた。「あっ」とお母さんが言って、ヒカル君が振り返ると長くて大きい蛇が、小道の右から左に這っていた。とても長くて大きい蛇なので、頭は左の草むらに入っているのに、尻尾はまだ右の草むらに残っていた。ヒカル君が振り向いた瞬間、ずるずると動いている蛇の頭と尻尾の先が見えなかった。長い長い蛇の胴がいつまでも果てし無く現れてはもぐり込んで続いていくように見えた。

蛇はヒカル君の記憶の中で、いまでも右の草むらから左の草むらへ移動し続けている。

引越してからしばらくして、ヒカル君はお母さんに前の家に行ってみたいと言った。ヒカル君は「引越し」は初めての経験で、いままでもわりにいた親しい人々や見慣れた風景がもうないということが不

思議だった。どうしていままで自分のいた場所がもうないのだろうと思った。いまいる家から、駅の近くの別の家に引越すのだということはお母さんから言われてよく理解していた。しかし、説明されて理解することと体験することはずいぶん違って、引越して周囲の景色や人間が変わることはヒカル君に大きな衝撃を与えた。

ヒカル君に、前の家に行きたいと言われて、お母さんは、ヒカル君はちゃんと説明すればなんでも理解できることを知っていたので、道順を教えた。ヒカル君の家の南側の小道を、東の方へ、田んぼの中の道を歩いていくと産業道路に出る。産業道路をしばらく南の方へ歩いていくと、小さな坂があつて、その坂はいつもお父さんが帰ってきた坂だ。坂を東に向かつて上つていくと、すぐにわんわんのお家と井戸があつた。井戸にはお婆さんたちが集まって洗濯したりおしゃべりしたりしていた。

ヒカル君がよちよち歩いて坂を上つてきたのを見ると、ワンワンのお

婆さんが、「あら、ヒカル君ひとり来たの？」と聞いた。三歳の子どもが歩いてくるにしては遠すぎるし、産業道路は車の通りが激しくて危険だったからだ。

ヒカル君は井戸端にいるお婆さんたちにいろいろ話しかけられ答えていたが、ちっとも嬉しそうな顔をしなかった。ヒカル君はお婆さんたちの顔をぜんぜんおぼえていなかった。お婆さんたちはヒカル君のことをよく知っていて、にこにこ話しかけてくる。引越したのはたった数週間前のことなのに、ヒカル君はすっかり忘れてしまっていて、知らない人に話しかけられているように、浮かない顔をしていた。なぜだかわからなかったが、もう前に住んでいた家は別の家のようだった。

ヒカル君は、しばらくして、「もう帰る」と行って、とことこ坂を走り出した。「ヒカル君、気をつけてね。また遊びにいらっしやいよ」とワンワンのお婆さんが声をかけた。

ヒカル君は坂を下りると、産業道路を走り出した。そのころの産業

道路はまで舗装されていなくて、ジャリ道だった。駆けだしてすぐにヒカル君はころび、ジャリのがつた三角の角で額を切った。ヒカル君は、額の右上から頬にかけて血を流し、わあわあ泣きながら産業道路を走った。

それからヒカル君は何もおぼえていない。

気がついたら、自分の家の縁側にいて、頭にはぐるぐると包帯を巻いていた。家の前の道に、自転車を持って降りたカズノリちゃんのお婆さんがいて、セルロイドの鉄砲を手を持って、「ヒカル君、これあげるよ」と言った。ヒカル君は、神妙な顔をしてだまつて縁側に立っていた。ただ首を振つて、いらなうと言った。ヒカル君はカズノリちゃんのお婆さんの顔をおぼえていなくて、知らないお婆さんに話しかけられたように、黙つてお婆さんの顔を見ていた。お婆さんは隣に住んでいたときに、とてもヒカル君をかわいがってくれ、ヒカル君が産業道路で転んでケガをしたときも、すぐに家まで連れてきてくれたんだ。だけど、ヒカル

君は何もおぼえていなくて、すべてがただ不思議な夢の中のことのように感じていた。



初めて買ったレコード

瀧本文彦

ベートーヴェンの音楽を聴くと、五味康祐の『日本のベートーヴェン』というエッセイを思い出す。

青年時代、名曲喫茶には、いつも腕を組み、まるで思想上の大問題に直面してもしたように瞑目し、あるいは頭髪を掻きむしり、晦渋な表情で、ひたすらレコードに聴き耽る学生がいた。そんなとき鳴っているのは、きまつてベートーヴェンだった。彼はコーヒーのためではなく、明らかにベートーヴェンのために乏しい財布から金を工面したのだ。郷里の親の経済状態をおもひ、下宿代の滞ったのを延ばす口実を何とか考えなければならなかったし、質屋の利息のこともある。アルバイトのあてもない。そんな時、突如としてベートーヴェンの調べは彼の苦悩にしみとおる。貧乏人ほどベートーヴェンに共感しやすい素地があるのではないか……。

一九六〇年代の始め、私は高校の音楽

室に備え付けられた再生装置で聴いたベートーヴェンの『第三交響曲（英雄）』にいたく感動していた。このような力強い音楽があるとは——ハンマーで頭を殴られたような衝撃だった。

田舎の我家にオンキヨーというメーカーのテレビがあった。当時のブラウン管は丸みを帯びていた。そして、モノクロであった。スピーカーは左右に付いており、ステレオであった。レコードが聴きたくて、ビクター製のプレーヤー買ってきた。キャビネットはプラスチックで出来ており、ピックアップもプラスチック。しかも、針圧は九グラムもある安物であった。さて、プレーヤーをテレビに接続したあとは、レコードを買いに行くだけである。レコードは一枚も持っていないのである。

早速レコード店に行った。小遣いが少ないので三〇センチ盤は買えなかった。十七センチ盤のコーナーでベートーヴェンを捜した。『月光の曲』というタイトルレコードを見つけた。これはロマ

ンチックな曲のようだ。色彩の豊かな絵画を見るような曲に違いないと思った。大事にカバンに入れて家に向かった。腫れ物でも触るようにジャケットからレコードを取り出し、九グラムのピックアップをレコードの上に慎重に置いた。何とピアノの音が鳴り出した。面食らった。オーケストラの曲とばかり思っていたのである。ジャケットをよく見ると、下の方に「(ピアノ) ルドルフ・ゼルキン」と書いてあった。

第一楽章を聴きながら、何か霧に包まれた遠くの景色を見ているようで、よく理解できなかった。第二楽章はおもしろくなかった。第三楽章はもやもや聞こえた。

指揮者のフルトヴェングラーは、「音楽は頭で理解するものではなく、肌で感じるもの、耳で感じるものだ。」と記者団に言ったということだが、私は耳でも肌でも感じなかった。がっかりした。しかし、そのレコード一枚しか持っていないのである。何度も聴いた。第二楽章には諧謔的に、第三楽章は力強く聞こえた。

聴き始めて三日目くらいだったろうか、第一楽章の右手が奏でる分散和音の絶妙な変化、その分散和音に乗って響く

切ない断片的なメロディを耳で捉えることができるようになった。だんだん霧が晴れてきたのである。名曲だな、と思った。読書百遍意自ずから通ず、といった所か。

『月光の曲』の第一楽章の譜面は単純である。冒頭の一小節と二小節では、右手の分散和音はミ・ラ・ドを繰り返している。左手のバスは二小節目で一音下にずらす。絶妙である。三小節目、和音がAメジャーからDメジャーに移る。そして、四小節目で(Cディミニッシュ)／(Gシャープ)からトニックに行つてFシャープ・ディミニッシュに変化している。短調と長調を微妙に使分けしている。暇ができたなら、第一楽章全体のハーモニー進行を勉強してみたい。

最初にもどるが、ベートーヴェンの音楽は貧乏人に共感を与える音楽だろうか。私は勉強も苦手で、背は低く、家は荒れ屋でコンプレックスの固まりだった。いつも夫婦喧嘩の絶えない貧乏な家庭に育ったからベートーヴェンに共感したのだろうか。五味康祐の言った事があっているような気もする。